

神様と師匠

龍の花嫁 1

EntsCat

<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18308747>

モ腐サイコ100, モブ霊, モ腐サイコ小説50users入り

神様とたたかう師弟を書きたかったので書いてしまいました。モブ霊です。

Table of Contents

- [龍の花嫁 1](#)

龍の花嫁 1

好きです付き合ってください師匠

と、言って、

ああいいよ

と靈幻が返したところだった。

（えっこれって今から恋人開始ってことなんですか？）
靈幻はお祓いグラフィックから目も離さずに、おざなりに言っていた。

話をきいていなかったのだろうか。

「あの。こっ、恋人になって欲しい、って言ったんですが」

「……わーってるよ」

靈幻の耳が赤くなっていく。

良かった、聞いてくれていた、と思ったらモブも顔が赤くなっていく。

照れ隠しの下手な師弟だった。

「おっ……と、もうこんな時間か。じゃあな、モブ。また明日」

「はい、師匠。……これから出張除霊でしょ？ほんとに1人で大丈夫ですか」

つとめていつも通りに話す。2人の必死の照れ隠しだ。

「あー、古いやしろの掃除の時期なんだけど、言い伝えのある場所だから念のためプロを呼んだ、って言ってたからな。あっちが仕事で日中はいないからどうしても夜のこの時間に、って言うし……未成年のお前を連れて行くわけにはいかんだろ。どう考えても便利屋がわりに呼ばれたとしか思えんしな……」

「……一応場所教えて貰ってもいいですか？市内なんですよ？帰りにちょっと見るだけ見ておきます」

「ん？そうか？なら頼むわ。塩中の近くにデカイ木のある公園があ

るだろ？そこに隣接してる古い日本家屋が依頼人の家だ」

「ああ、あそこですか」

モブも何度か通りがかったことのある場所だった。相談所からも近い。モブが怪しい気配を感じたこともないので、霊幻の言う通り掃除の便利屋として呼び出された可能性が高かった。

「じゃあ師匠、また明日」

モブは荷物をまとめて家に向かう。

少し寄り道して依頼先を覗いたが、やはり何も感じなかった、と霊幻にメールがあった。

「さてと……」

夜中に近い依頼なので、先に夕飯をすませてしまおう。

そう思った霊幻は作業中の画像編集ソフトを保存して終了し、開きっぱなしだったメール画面も、新着メールが無いか確認してから、閉じた。

※※※※※※

夜10時。

霊幻は言われたとおりに日本家屋に向かう。

門の所にあるチャームを押して、待っている間じろじろとその大きな建物を見回していた。

ふと。鉄格子の門の向こうに、折れた大きな赤い木の杭が地面に刺さっているのが見えた。

（これだけ太い杭なら、抜くのも大変だろうな。腐ってるみたいだし、朽ちてくのを待ってるのか……）

「お待たせしました」

気配の無いお婆さんの声に、近づいていたことに気が付かなかった霊幻は飛び上がりそうになる。

暗い中に黒い着物を着ているので、余計に真っ白な顔と白髪以外は、闇に溶けているかのような老婆だった。

「はははは、とんでもない！いいお着物ですね、上有さん」

「安い留袖です」

「……すみません」

「先生はおモテにならないとか」

「……ご覧の通り、着物の目利きもできない男ですので」

「そうですね。ではこちらへ」

どうやらクセのあるらしい老婆は懐中電灯で足元を照らしながら、日本家屋の左側、公園に面した庭を案内する。

しばらく歩くと、小さな小屋ぐらいのサイズの、想像していたよりも大きな神社のような建物が現れた。

「先生、これをお使いください」

老婆がハタキやちりとり、雑巾と割烹着を差し出す。

「あ、これはどうも」

ジャージを汚さないですむ。

が、貸してくれた白い割烹着はやけに袖がたれている変な形のものだった。

「……」

依頼人が貸してくれたものに文句を言うわけにもいかない。

たくしあげれば掃除ができないわけではないので、霊幻はこれによしとすることにした。

「入口が封印されているようですが……」

「形だけです」

神社でよく見る白いイナズマ形におられた紙が、紙のこよりのようなもので扉の左から右にかけられている。

「どうぞ、」

「『ちぎって』 お入りください」

そう言われた霊幻は、そのこよりを『ちぎって』扉を開けた。

※※※※※

「ようシゲオ、今日は神社にお参りでもしてきたのか？」

「エクボ。今日も悪霊を食べに行ってたの？」

「まあな。でもそんな神気を振り撒かれちゃいづれえよ……ちょっとおさめてくれ」

「神気……？ああ、このちょっとあったかいやつか」
いつのまに付いたんだろ、と首を傾げながら、シゲオは呪いに似たソレをはらう。

「でけえ神社だったろ？それだけの神気を授けるなんて」

「神社になんて行ってないよ。古い、忘れられたやしるを依頼で見ただけ」

「ふへん……オイまさか、その中に入ったりしてないだろうな？」

「僕は入ってないよ。でも師匠は掃除しに入るって言ってた」

「……今すぐ電話して止めろ。今すぐにだ！！」

「えっ、あっ、うん」

コール、コール……留守電につながる。

出ない。

「ハメられたな……最近俺様の霊素が妙に削られると思ったら、ソイツらがおまえらから引き離すために削ってたんだ」

「……どういうこと？」

「あのインチキ野郎、おそらく『神』に崇られた」

「かみ……」

口に出してモブの顔がどんどん青くなる。

「それってマズいんじゃない……！」

「マズいなんてレベルじゃねーよ。……生きてるかどうか」

「師匠……！」

モブは部屋着のまま家を飛び出した。

師匠が無事でありますように、と祈りながら。

続